

教養関係の中国語の学習について

—初習者向けの授業改善の試み—

● 陸 偉 榮

一、はじめに

筆者は2005年10月から跡見学園女子大学の中国語非常勤講師となり、一年生の中国語入門と中国語基礎、二年生の中国語コミュニケーションを担当している。一年生の中国語入門と中国語基礎の授業はゼロからのスタートであり、クラスは例年30人前後で、週2回、一年を通して中国語の入門から基礎項目を学ぶことになる。二年生の中国語コミュニケーションの授業は、一年次に学んだ内容を復習しながら、中国語で会話をするという会話中心のものである。いずれも教養関係の中国語の学習であり、これまで学んだ内容を再確認することからはじめ、それを土台に読み書き能力の向上を目指す授業を行っている。二年次の授業はとくに中国語の表現力を高めるために表現のパターンを学習することを重視している。

一年次も二年次も関連の文法事項や中国事情も合わせて授業を進めていくが、文法については作文の練習でその理解度を確認している。また、中国文化などをできるだけ授業中に紹介し、現代中国への理解を深めていく。本稿では主に一年次の中国語、つまり初習者向け授業の改善について考察を加えてみたい。

二、学生の特徴と動機づけ

跡見学園女子大学は中国語学習に関する目標を明確に示している。「中国語入門」では、中国語で「普通話」と呼ばれている共通語を初歩から学び、中国語学習の基礎固め、特に春学期は初級中国語の要である発音と、もっとも基本的な文型の習得を目指す。また、中国文化や中国人の生活習慣、思考方法についても学習者なりの認識をもてるようにする¹⁾。

また、「中国語基礎」では、「中国語入門」で固めた発音を中心とする基礎の上に、文法や表現に関する知識を蓄積し、運用能力を発展させる。最終的にはこの授業の終わりの時点で、初級中国語の「読む・書く・聞く・話す」能力の基本段階が達成されていることを目指す。また、中国の文化や中国人の生活習慣、思考方法などについての認識も、より深いものになるようにする²⁾。

女子学生のための大学であるためか、礼儀正しく、性格も物静かで内気な学生が多い。そのおかげで授業が非常に進めやすいが、その一方、クラス全体の傾向として授業中にあまり質問が出ないため、教員は学生との意思の疎通に気を配らなければならない。

多くの学生の受講態度からは、中国語を勉強したいという強い意志を看取することができる。しかし、初回の授業の際、なぜ中国語を選んだかを学生に尋ねると、はっきりと答えられない者も少なくない。(表1) つまり中国語学習の動機について明瞭ではない学生が多いのである。そもそも入学当初に、科目として中国語を選ぶ際、その理由について深く考えた人もそれほどいなかったようである。

しかし中国語教員である以上、当然ながら学生の学習意欲に注目する。学習者にはっきりとした動機や学習目標がなければ、学習効果に影響が出る上に、長続きしない結果となることが予想される。教員としては、まず中国語や中国に関心と興味をもってもらうことから始める。

表1 中国語初習者調査

中国語学習についての動機	これまでの初回授業の回答
	<ul style="list-style-type: none"> ・単位を取得するため ・簡単そうだから ・将来中国留学に役立てるため ・これから中国の時代だから ・仕事に役立ちそうだから ・親に言われたから ・何となく
自分の中国語学習の目標	授業に提示された回答
	<ul style="list-style-type: none"> ・中国人と会話ができるようになりたい ・中国人の友達がほしい ・中国語検定試験に合格したい ・もっと流暢に喋りたい ・中国で旅行するときに中国語を使いたい ・中国で仕事をしてみたい ・親の仕事（自営業）の手伝い ・中国語で手紙が書きたい、文通したい

また、中国語学習の動機づけについて、就職という現実的な問題に最も注目すべきだ。現に中国語学習は就職に役立つという報告がある。現在、中国語が堪能な人は、英語が堪能な人ほどたくさんはいない。そのため、中国語学習で中国語を身につけた人や、中国語ができる人は、就職も有利になることがあるのは事実である。学生諸君にこれらの事実を知ってもらうことは、中国語学習のモチベーションアップにつながると考えられる。

三、中国語授業への取り組みと工夫

1 学習者に見える目標を持たせる

跡見学園女子大学においては、中国語学習に関する目標を明示しているにもかかわらず、本科目を選択した学習者に聞くと、必ずしもシラバスに書かれている内容をチェックして授業に臨んだと限らない。そこで授業では、大学に定められている一年の目標を基準に、さらに学習者各自の達成しやすい目標を最初に認識してもらうことにする。すると、中国語検定試験に合格したい、もっと流暢に会話をしたい、中国で旅行するときに中国語を使いたい、中国語で手紙が書きたいなど、学習者各々が独自に目標設定を行うことができた。（表1 参照）

このように各自が自ら具体的な目標を認識すると、学生はその目標に向かってどう実現するかも意識するようになり、授業に関心も持つようになる。その結果として、例えば、普段の大学の授業受講に加えて、中国語映画を視聴したいという学習者から、ラジオやテレビの語学番組にも取り込んでみたいという要望が出たり、夏休みや春休みに海外留学したいという希望が出るなど、積極的に教員にアドバイスを求め相談にくる学生もいた。教員としては様々な参考意見を出しながら、温かく見守っていく。

2 学生参加型授業の実践

跡見学園女子大学における初習中国語の授業は、週2回の授業であり、一人の教員が2回とも担当する場合は、それぞれ文法と会話に重点を置いた。周知のとおり、日本人の中国語初習者にとって、中国語の発音は第一の難関である。これまでクラスを4つに分け、各小グループが6～7人くらいからなるようにし、各課の発音や会話の練習に積極的に参加してもらうだけでなく、各課で出した課題や学習の成果を互いにチェックし合い、学生各々が参加しやすい授業を心がけた。

日本人教員と中国人教員の連携授業を行う場合、共通のテキストを使用して、日本人教員が文法事項を説明し、中国人教員が会話練習を担当することになる。この場合、ネイティブの人が聞き取れるように発音の練習に重点を置き、前期と後期それぞれ3～4回の発音テストを行い、その成果を確かめている。また、毎週授業の最初に小テストを行い、受講生の授業に対する理解度などを把握している。

たとえば、2011年度の場合、テキストには各課に単語表がなかったため、グループで単語表を作ってもらうことにした。新出語句のため、“有点儿”(いささか)“有意思”(面白い)がそれぞれ一つの単語になるのを知らず、“有点”“意思”と誤って作成されるような場合もあるため、必ず教員がチェックしてから全員に配布するようにしている。単語表作りは、発音のピンイン表記や日本語の意味を調べる、中国語で書くなど、総合的な練習となるため、予想外の効果を生んでいる。また、学生諸君にとっては初めて中国語を用いてパソコンに入力する体験をすることになり、その喜びは印象的だった。

3 知識と技能のバランスを追求する

中国語のみならず、初習外国語を知識として教えるのか、それとも技能として訓練し習得させるのかによって教育方法は異なってくる。そもそも外国語の習得において、「聞く」「話す」「読む」「書く」といった4技能が言語能力とされており、総合的訓練を行わなければならない。

今日の認識では、外国語としての中国語は知識ではなく、技能である。これについては、すでに学会でも共通認識³となっているが、現実では知識として扱われている場合もあるようだ。外国語を知識として否定するつもりはないが、知識として紹介するとともに、技能とのバランスを追求すべきだ。

たとえば、授業のはじめに行うのは中国語で出席を取ることである。これは自分の名前の正しい発音を聞くいいチャンスでもある。最初は隔週で実施し、慣れてからは毎回中国語で点呼する。また、会話学習においても簡単な挨拶から始める。これまで一年間の中国語を習ってきた学生でも、“你好吗?”(元気かい?)という簡単な問いかけすらどう返事するのか戸惑う者がいた。そのため、会話はまず簡単なものから覚えてもらうことにした。

出席を取ると同時に、学生諸君に一人ずつ異なる一言、“你好吗?”(元気かい?)や“你贵姓?”(お名前は?)で問いかける。学生の傾向として、周りに合わせて答える学生が多く、そのため、なるべく多くの質問を用意し、同じ質問を避ける。時には「先生に中国語で一つ質問してみよう」という時間を設け、これまで習ってきた内容を復習させる。

こうして毎回の繰り返しによって、学生たちは徐々に長い会話にも抵抗がなくなり、知らずうちに中国語会話を習得していく。会話練習の時間では、教員が聞き取れるまで何回でも繰り返しを行うため疲れも出る。そのタイミングで中国文化、中国人の考え方、習慣、最新事情などを紹介し、その課に出ている内容とリンクさせたりする。

また、文法の授業では、説明した項目について必ず作文を課題として課し、完成させてもらう。これは「書く」技能ではあるが、文法について正確に理解し応用できるかの確認でもある。授業の流れとして、

- (1) 出席を取りながら、各自の名前の発音確認？や会話を行う（20分）。
- (2) 前回の課題を確認し、習った内容を復習する。（20分）
- (3) 新しい課の単語学習。（10分）
- (4) 新しい課の文法学習と練習。（30分）（2回目では会話の練習など）
- (5) 最後に今回の課題の確認。（5分）
- (6) もう一度当日の新しい学習内容をまとめておく。（5分）

4 発音訓練への工夫

漢字・漢文化を共有することから、中国語の学習者には、中国語と日本語が非常に近い言語であると勘違いされやすいように思われる。中国語と日本語の違いについては、やはり最初からはっきりと学習者に説明し、認識してもらわなければならない。以下は「発音」と「文法」に分けて考察を進めたい。

日本語は「端」「箸」のように、アクセントが高低の2種類しかない。アクセントのバリエーションも非常に少ない。これに対して、中国語は四声があるため、2つの音の組み合わせの場合は、軽声も含めると20種類にものぼる。

また、日本語と違って、中国語には二重母音があれば三重母音もあり、記号の読み方が変わる場合もあるため、規則に慣れるまでに大変時間がかかる。

さらに、中国語には日本語に無いそり舌子音がある。これは英語と同様、舌を反らせながら発音する音で、ch、zh、sh、r との4種類に「アル化音」も加える。これらは日本語にない発音なので、日本人学習者にとって発音も聴解も難しい。

こういう場合、学生が習いやすい、発音の真似をしやすい環境を作るのが大切で、発音する際に口の形がわかる映像資料やビデオなども使い、正確な発音を習得できるまで急がせないように極力心がけている。もっとも効果的なのは、学生が興味のある映画などを用いて、その台詞を何度も聴きながら「いまの発音は〇〇でしょうか、〇〇でしょうか」とヒントを出しつつ質問をしたりする（図1は中国映画「恋人たちの食卓」で、図2は中国映画「胡同のひまわり」）。このとき、教師は我慢強く、温かく見守るべきである。



図1 中国映画「恋人たちの食卓」



図2 中国映画「胡同のひまわり」

5 表現形式の理解への工夫

中国語は、孤立語であり、語形変化がないことは大きな特徴である。中国語の文を構築するときには日本語のように「テニヲハ」といった助詞は用いない。その代わりに、単語と単語間の関係を説明し意味を成立させるのは語順なのである。日本語の場合、「SOV」（主語―目的語―動詞）という語順であるが、これに対して中国語はいわゆる「SVO」（主語―動詞―目的語）の順番となる。この語順はすなわち中国語表現のルールである。このルールの習得は中国語初習者にとってそう容易ではなかった。

例えば、「私は学校へ行きます。」との構文は、中国語では“我去学校。”となる。これは一年通して学習をしてきた者でさえも、“我学校去。”のような間違いをおかす場合が少なくない。日・中同じ漢字を用いているからこそ、日本語の構文と錯覚しやすいようだ。実際、一年次後期授業の終わりになっても、“我学校去。”“她词典买昨天”の構文が非常に多く見受けられる。

“我学校去。”“她词典买昨天”では、一見初歩的なミスのようなのだが、特に“她词典买昨天”では、時間を表す“昨天”を文の最後に置いており、英語の語順と混乱を来しているようだ（表3参照）。こうした例も少なくないため、教師はやはり常に語順の違いを意識させながら注意を呼びかける。基本はいつまでも忘れずに徹底させ、復習させるのだ。

6 板書を大いに利用する

日本語は「昨日は寒かった。」「今日は勉強する。」のように、形容詞・動詞は時制によって明確に使い分け、昨日なら過去形を使う。しかし形容詞の場合、中国語では過去であろうとなかろうと、完了を表す助詞“了”はつけないのが普通である。また、動詞の場合、「完了・実現」を表す過去の動作であれば、“了”を付けたほうが自然な場合が多い。

表2 問題の“昨天冷了。”について

“昨天冷了。”について、その正確な表現とは	
<p>昨日は寒かった。</p> <p>↓</p> <p>◎昨天很冷。 ×昨天冷了。</p>	<p>昨日は寒くなった。(状態の変化を表す意味)</p> <p>↓</p> <p>△昨天冷了。 ◎昨天冷起来了。</p>

しかし実際の授業では、“昨天冷了。”のように書く学生が非常に多い。「中国語の形容詞は過去を表す場合でも日本語と同じだろう」という短絡的な考えの結果かもしれない。この場合、板書は効果的である。筆者はいつも異なる色のチョークを用意して、板書で表2のように示しながら説明する。模倣能力が優れている学生諸君は、教員のチョークの色に合わせてノートに写している。その真剣さを見て安堵があった。

例の問題は、まず日本語で「昨日は寒くなった」のつもりで言ったかどうかを確認する。「昨日は寒かった」のつもりであれば、“昨天很冷。”という表現が適切であることを認識させる。表2中の◎部分だが、「状況の変化を表す」意味で使う場合、“昨天冷起来了。”はもっとも適切であること、「形容詞＋～起来」のパターンを用いることも説明する必要がある。

また、中国語の量詞についてもそうだが、日本語の助数詞にほぼ相当する中国語の量詞は非常に多くまた複雑である。

表3のように、日本語の「本」をそのまま中国語の「本」と思い込んでいる学生が多い。「本」

という字は中国語では量詞であり、日本語でいう「本」は正確には“书”である。また、「私はラーメン 2 杯を食べた」を“我们吃了两杯拉面。”と書き、「2 杯」という日本語を安易に中国語にも適用する例もみられる。

表 3 で示している“我去听这家企业的说明。”（私はこの会社の説明会に行ってきた）だが、企業・病院などを数えるとき“家”という量詞を用いることは、実際学生が覚えて応用できるまでたいへんだった。もちろん、「台」という字のように携帯電話やテレビなどの量詞として、日本語と共通している場合もある。

やはり常用量詞を表にまとめ、共通している場合、異なる場合をはっきりと区別して、学生に慣れるまで練習させる。

このように、個々の問題について学習者が理解するまで、対比などを使って説明する。今日、語学教育として LL 教育やオンデマンド授業などが普及しているが、現代技術を用いた教育現場では、教育成果はそれに相応して得られているとはいえない。中国語板書を見てそれを写すことは、機械に慣れている若者にとってよい訓練でもあり、教員の板書は学習に役立つのである。

このようにして難しいことでも毎回繰り返し忍耐強く練習すれば、必ずマスターできると確信している。

表 3 日本語・中国語表現の違いによる問題

語順の問題（表現例）	正確な表現
我学校去。 她词典买昨天。 昨天冷了。 我们上课从九点到十二点。	・我去学校。（私は学校へ行く） ・她昨天买了词典。（私はきのう辞書を買った） ・昨天很冷。（昨日は寒かった） ・我们从九点到十二点上课。（私は 9 時から 12 時まで授業です）
量詞の問題（表現例）	正確な表現
她给我一个本。 我们吃了 <u>两杯</u> 拉面。 我去听 <u>这家</u> 企业的说明。	・她给我一本书。（彼女は私に本を 1 冊くれた） ・我们吃了 <u>两碗</u> 拉面。（私たちはラーメン 2 杯を食べた） ・我去听 <u>这家</u> 企业的说明。（私はこの会社の説明会に行ってきた）

四、終わりに

本稿は、教養関係における中国語学習の現状と問題点を認識し、学生の特徴と動機づけに留意しながら、実際の授業に照らして発音と文法の両面から中国語授業への取り組みについて論じた。とくに中国語入門の段階では発音の練習、復習は非常に大事で、必ず毎回時間をかけてやるべきものである。その取り組みと工夫は知識だけでなく、技能とのバランスをも追求していく必要がある。これらは主に初習者向けの授業改善につながる。

外国語の応用力・実践力をつけるためには、その言語を母国語としている外国へ留学するのが最もよい方法だが、初習段階に過ぎない学生にとっては現実的ではない。一方、日本の各地にはいま多くの中国人留学生や観光客が来ている。これは、中国語を習得する上で大いに利用すべき点である。今後、中国人と中国語を学んでいる日本人の学生が積極的に交流することができるような場を設定し、お互いに交流を通して学ぶことができるように考えたい。

他方、初習中国語の教育を考えると、民間の外国語学校との差別化を明確にする必要がある。

大学においては、中国語が初修言語である場合は、極めて当たり前のことだが、基礎をしっかりと教えるべきであると同時に、中国語を学ぶことの楽しさをいかにして伝えるかが重要であろう。その楽しさは、文化や社会の多様性を理解することに根ざしていなければならない。義務教育や受験のために勉強をしてきた学生たちに、長い学校生活の最後にあたる大学では、人生を豊かにし楽しむための学びをこそ伝えるべきであろう。中国語教育とは、社会生活を送るうえでの自信につながるスキルの一つを身につける機会であること、そして、多様な知的好奇心の種を植える機会でもあることを、教員は深く自覚せねばならない。

- 1 跡見学園女子大学全学共通科目シラバス参照。
- 2 前掲シラバス参照。
- 3 中国国家対外漢語教学局『漢語水平等級標準与語法等級大綱』（1996年）、日本中国語学会ソフトアカデミズム検討委員会編『日本の中国語教育—その現状と課題・2002—』（日本中国語学会 2002年）を参照。